

氏名(国籍)	ちえ 蔡	すん しっく 盛植(韓国)
学位の種類	博士(言語学)	
学位記番号	博甲第3587号	
学位授与年月日	平成17年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	文芸・言語研究科	
学位論文題目	意図性と因果関係に関する対照言語学的考察	
主査	筑波大学教授	博士(言語学) 鷺尾龍一
副査	筑波大学教授	文学博士 廣瀬幸生
副査	筑波大学助教授	加賀信広
副査	筑波大学助教授	Ph. D. 竹沢幸一

論文の内容の要旨

事象の認識およびその言語化をめぐる研究において、《使役》は常に中心的な位置を占めてきた。日本語の場合、使役接辞と受動接辞はいずれも未然形接続のパラダイムに属し、ヴォイスの体系において等しく重要な位置を占めているが、自然言語全般について言えば、明らかに使役の方が普遍性の高い現象である。受動の形式を欠く言語はあっても使役の形式を欠く言語は存在しないと言われるほど、人間にとって使役は基礎的な概念であり、それを言語化した諸形式の分析は、言語の普遍的機構に直結する手がかりを与えてくれるのではないかと期待を抱かせる。そのため、使役をめぐる諸問題は、言語類型論、生成意味論、極小主義統語論、語彙概念意味論、認知言語学など、枠組みの相違を越えた関心事となり、これまでの研究により、使役に対する理解は着実に深まってきていると言えるが、本論文は、《使役》の概念規定には未だに本質的不確定性が残されているとの認識に立ち、解決すべきいくつかの重要な問題点を指摘している。例えば次の(1)は、典型的な使役動詞の意味を捉える語彙概念構造の例であるが、

(1) **[[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME z]]**

これによれば、使役動詞 π は特定の状態変化を含意することになるため、 π に基づく使役文 P に続けて、 π が含意する変化 Q を否定することはできないはずである。事実、英語のような言語では、P BUT NOT Q に相当する文は一般に論理的矛盾を引き起こすが、同様の形式が適格文として成立し得る日本語のような言語も存在する。著者が《結果キャンセル》と呼ぶこの現象は、これまで漠然と想定されてきた(1)のような概念構造の《意味》と、諸言語において使役形式が実際に担う言語的意味との関係を、根本的に問い直す必要があることを示すものであるが、ここには、言語間の差異をめぐる類型論的な問題が生じるだけでなく、同一言語の母語話者間に存在する判断の相違が、重要な経験的問題として浮かび上がってくると著者は指摘する。語彙的使役の概念構造をめぐる著者の議論は、いわゆる結果構文における使役の意味の問題へと拡張され、さらには、生産的使役形式が使役のプロトタイプから逸脱するという現象に対しても、同様の視点から考察が加えられる。これらの議論は《意図性》という概念を軸に展開されるのであるが、最終的に著者は、これを語用論のレベルに属する概念として規定すべきであるとの結論を導き出している。

本論文は5章からなる。第1章では論文全体の枠組みが提示され、使役構文に関する先行研究が概観されている。使役行為という概念を定義する場合、主体による基礎行為、対象に生じる状態変化、基礎行為と対象の変化を結ぶ因果関係、などの下位概念が重要な役割を果たすと考えられる。「紙を燃やした」「子供を椅子に座らせた」は、形式的な観点からはそれぞれ語彙的使役、迂言的使役と分類し得るものであるが、これらは一定の事象構造（《行為者による対象への働きかけ→対象に生じる変化→行為者の意図していた結果の達成》）を共有しているため、いずれも使役行為を言語化した形式とみなすことができる。しかし、使役構文に共通する事象構造を抽出しようとする、直ちに困難な問題に直面する。本章では、次章以降への背景として、そうした問題のいくつかが整理されている。

第2章では、日本語における結果キャンセル構文の様々な類型が示され、現象の本質が明らかにされる。P BUT NOT Q に関する日本語と英語の対立は、従来「英語は行為によって生じる結果が語彙内在的に指定されているのに対し、日本語にはそのような指定が存在しない」などの一般化によって捉えられてきたが、このような接近法では説明しきれない多数の事例が存在することを、著者は本章で明らかにしている。

行為によって生じる結果が語彙的に含意されるか否かという点は、日本語の記述においても一定の役割を果たしてきた。使役表現の一種である結果構文は、THE HORSES DRAGGED THE LOGS SMOOTH. などに代表されるタイプと SHE PAINTED THE HOUSE RED. などに代表されるタイプに下位分類され、日本語は後者のタイプのみを許容することが知られている。日本語では、動詞が結果を含意する場合に限り結果構文が成立する、というのが従来の典型的な一般化であるが、第3章では、この一般化の問題点を中心に、日本語における結果性の概念が論じられている。

日本語には、「戦争で息子を死なせる」などの使役表現が存在するが、使役の概念構造が【[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME z]】のようなものであるとすると、この種の例は使役表現ではないことになる。上例の概念構造が CAUSE などの関数を含むとは考えにくいからである。第4章では、上のような例を受動表現に近い構文とみなす可能性が論じられ、出来事と個体の間に成立する《影響性の方向》という観点から分析が試みられている。

第5章では本論文の主要な議論が要約され、残された問題および今後進めるべき研究の見通しが示されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

使役動詞 π に基づく使役文 P に続けて、 π が含意する変化 Q を否定する形式 (P BUT NOT Q) は、英語では一般に論理的矛盾を引き起こすが日本語では適格文として成立する場合があると言われている。この対立を両言語の語彙構造における組織的な差異の反映とみなすのが従来の典型的な立場であるが、本論文が疑問の余地なく明らかにしたのは、我々の予想を遙かに超えた現象の複雑さである。とりわけ重要なのは、P BUT NOT Q の許容度に関して日本語には少なくとも二種類の話者が存在する、という観察である。この形式を許容しない話者が日本語にも存在するという事実は、問題の現象を言語間の類型論的対立として捉えるという従来の考え方に根本的な疑問を投げかけるものである。著者は、この現象を支配しているのは本質的に語用論の原理であると主張し、母語話者の判断が分かれるのは、Levinson の Quantity-principle に従う傾向が強い《Q-type の話者》と、Informative-principle に従う傾向が強い《I-type の話者》が存在するからであるとの仮説を立てている。これは極めて独創的な仮説であり、単なる個人差として処理されがちな観察に原理的な説明を与える試みとして高く評価できる。

P BUT NOT Q の許容度に関して母語話者の判断が分かれるという現象は、著者の母語である韓国語においても観察されると言う。次の二例は、それぞれ「紙を燃やしたけど燃えなかった」「ドアを開けたけど開

かなかった」に対応する例であるが、韓国語にもこれらを許容する《I-typeの話者》と許容しない《Q-typeの話者》が存在する。

(2) 종이를 떼웠지만, 타지 않았다.

(3) 문을 열었지만, 열리지 않았다.

韓国語は、したがって、結果キャンセルの現象が認められるという点では日本語に近い性質を備えていると言えるが、《I-typeの話者》が結果キャンセルを許容する際の意味解釈の方式が、日本語と韓国語では微妙に異なると著者は指摘している。これが正しければ、英語とも日本語とも異なる第三のタイプを実現している言語が存在することになる。韓国語の母語話者ならではの内省と周到な調査に基づくこの観察は、この分野の類型論的研究に重大な影響を与える可能性があり、著者独自の発見として高く評価できる。

本論文は、これまで主に概念構造のレベルで説明が試みられてきた諸現象を再吟味し、その理論的説明において概念構造以外の要因が果たす役割の重要性、とりわけ語用論的な原理の重要性を明らかにした研究である。複雑な言語現象に対するこの接近法は極めて健全であり、新たに発掘された言語事実や独創的な説明方法にも高い価値を認めることができる。

しかし、残された問題も少なくない。最も根本的な問題としてここで指摘せざるを得ないのは、類型論的特性-あるいは特定のパラメータの値-を反映した言語変異の取り扱いである。著者の指向する語用論的接近法は、同一言語の母語話者による判断の不一致を的確に捉えているように見えるが、同種の現象に関して、そもそもなぜ母語話者の判断が一致する言語と一致しない言語が存在するのであろうか。著者によれば、英語には《Q-typeの話者》しか存在しないことになるが、これが偶然であるとは考えられない。任意の言語Lに《Q-typeの話者》しか存在しないとすれば、それはLが《I-typeの話者》を許容しないためであると考えざるを得ず、その空白は、当然Lが備えている独立の性質 λ に還元されなければならない。

λ の正体は、現時点では誰にもわからない。したがってこの問題は、本論文の著者だけに突き付けられるものではないが、説明の中心に語用論的原理を据えた著者にとって、 λ との本格的な取り組みは避けて通ることのできない重要な課題となる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。